連日降り続いた雨が漸く上がり、久方振りに晴れたある日の朝。
燦々とした日差しに何を触発されたのか、家事手伝いも兼ねている助手の少年は、朝から妙にはりきってしまい、やれ洗濯だの布団を干すだのとそこら中を動き回り、己もまた巻き添えを食らって抵抗虚しく布団を引き剥がされてしまった。
折角ぬくぬくと昼まで寝くたれてやるつもりだったのに。台無しじゃないか。
不貞腐れて寝床に座り、乱れた夜着もそのままに、一向に朝の支度を始めようとしない自分の往生際の悪さに慣れて久しい少年は、己に注がれ続ける恨めしそうな視線など物ともせずに素早くシーツを取り外し、其れを大雑把に畳んで寝台の端に置いた後布団を抱えて部屋から出て行ってしまった。大方屋上辺りで干すのだろう。
腹の辺りをぼりぼりと掻きながらふわああ、と大欠伸をしたところで少年が戻って来た。
相も変わらずお早いお仕事ぶりで、と半ば呆れながらぼんやりとした目で眺める自分を少年は更に呆れた目で見返し、溜息をつきながら徐に近寄ってきた。間近に立たれても身動きひとつしない自分を前に再び溜息を吐きながら、少年は自分の襟元に手を伸ばし。乱れた其れを整えつつ口を開いた。
「もういい加減諦めて起きてください。朝餉は用意してありますので」
「‥‥ライドウは、」
とめどなく漏れ出でる欠伸を噛み殺しつつそう問えば、もう済ませましたとつれない言葉が返って来た。
「‥‥なんだ。ってことは俺だけ、」

「いえ、今日はゴウトもまだ済ませていない筈ですので、ご一緒にどうぞ」
俺は其の間、シーツを洗っています。
両脇に腕を差し入れて抱えられ、無理に立たされた。まるで子供のような扱いに多少の面白くなさは感じるものの、朝に弱い自分の身体と頭脳は一向に活動を始めようとはせず。仕方なしに少年の促されるがままに歩を進め、背後で少年がシーツを引き剥がす気配を感じながら鈍い足取りでバスルームへと向かった。

ざああ、と流れる水で顔を洗い、正面の鏡に顔を映す。
「あー・・・・伸びてきた、か、な」
上向きになりながら顎へ指を走らせると、僅かにざり、とした感触が指先を擽った。
「・・・・剃るか」
嗚呼面倒くさい、と溜息をつきながら仕方なしに用意を始める。
陶器の器に粉を僅かに落とし込み、少量の水を加えてブラシで泡立てる。やがて出来上がった真っ白なクリィムを己が顔に塗りたくり、剃刀を当ててゆっくりと剃り始めた。背後でぎぃと扉の開く音がしたので鏡越しに目を滑らせるが、其処には誰の影も存在せず。はて何だろうと思い手を休めて振り返ると、遥か下方からにゃあ、と鳴き声がした。声の主である黒猫は、再びにゃあと鳴き、そのまま
するりと扉の隙間から出て行った。どうやら自分があまりにも遅いので急かしにやって来たらしい。
これは早く支度をせねば後で仕置きを喰らいそうだ。

時折少年が正座した姿勢で黒猫に説教を喰らっている様を思い浮かべ、あれは何時見ても和むんだよなぁと笑みがこぼれるが、しかし自分が其の立場に順ずるのはどうにも勘弁して欲しかったので、素早く剃刀を走らせることにした。

結局洗顔を済まして髭を剃っただけ、といった有様で夜着のまま食卓へ姿を現せば、卓上でずっと待っていたらしき黒猫は何か言いたげにこちらを見遣った後、諦めたように視線を逸らした。これが少年であれば容赦なく爪が飛んでくるのだろうが、もういい年の大人で目付け対象でもない自分相手に其処まで小煩く言うつもりはないらしい。

燐寸を擦りガスコンロに火を点け、先ずは黒猫の朝食をぎっと暖める。次いで汁の入った鍋を置き、一旦コンロから離れて黒猫の方へ徐に腕を伸ばすと、彼は一瞬迷ったようだが結局は自ら歩を進めて身を委ねた。下手に暴れて卓上の朝食をひっくり返してしまうことを嫌がっただけなのかもしれないが、其れでも拒否されなかったことを嬉しく思う。

夕べ風呂に入ったばかりの彼の体は自分が起きてくるまでの間日向ぼっこでもしていたのか、普段にも増して尚一層ふかふかとして暖かかった。吸い寄せられるように頬を摺り寄せると流石に嫌がられたが、爪を立てられないのをいいことに二、三度擦り寄ったところで我慢した。これ以上やってはあまり頑丈とは言い難い彼の堪忍袋の緒が切れてしまうだろう。

そうやって一方的な親睦を深めている内に鍋からことことと聞きなれた音がし始めたので火を止め、黒猫を卓上へと戻し椀を手にとって汁を注ぎ、脇に置いた行平鍋からおかか雑炊を掬って黒猫用の器

に程よく盛った。
薄っすらと湯気の立つ雑炊の器と豊かに立ち上る自分の椀を卓上へと運び、熱いところもあるから気をつけろよと注意を促すと不快気ににゃあと返されてしまった。どうやら猫扱いするなと叱られたらしい。
苦笑しつつもお櫃を引き寄せ己が茶碗に飯を盛り、其れを卓上に置いてから席に着いた。
「いただきます」
手を合わせて挨拶の言葉を口にすると、斜め向かいに居る黒猫も其れにあわせて頭を垂れた。本人にはいたく不本意だろうが、其の動作は何度見てもかわいくて仕方がない。自然緩む自分の口元を手に持った椀で誤魔化しながら味噌汁を飲む。黒猫がおかか雑炊に舌鼓を打つのを眺め、こういったものを好んで食す割にはねこまんまだけは断固として拒否し続ける彼の内面の葛藤を思いやり、また笑みが浮かびそうになるのを堪えた。
現役時代であれば朝から結構な量が口に入ったものだが、激務から遠ざかること早数年。自分の口はすっかり元へと戻ってしまい、朝にはあまり入らなくなってしまった。年齢故だけではなく消費熱量がそれだけ違うのだということにして（別に全く根拠の無い主張ではない。前の晩に少年とそれなりのことを致した翌日には矢鱈と腹が減って‥‥、いやそんなことはどうでもいい）、浅漬けをぽしぽしと音を立てて噛み、飯を腹に収めた。
食事を終え、自分は煎茶をすすり、黒猫は毛繕いをするといった具合に各々寛いでいると、制服の上着を脱ぎ白い襯衣の袖を肘上までめくった少年がキッチンへと入ってきた。

「随分と早いな、もう終わったのか」
目を見開いてそう問えば、シーツだけでしたのでとの答えが返って来た。どうやら衣類の洗濯を済ませてから自分を起こしにやって来ていたらしい。
そつのない行動に苦笑しながら、手馴れた動作で前に並ぶ食器を片付け始めた少年の邪魔にならぬよう上体を椅子に預ける。台を拭く少年の、薄い襯衣越しに浮かぶ筋肉の形につい目が奪われそうになるが、朝からこんなところで盛る訳にはいかず、全く自分は今年で幾つになるんだと慌てて視線を逸らした先で、日めくり式の暦表が目に入った。
其処に刻まれた日付を見て、何かが引っかかった。
湯飲みを片手に小首を傾げていると、其れを見咎めた少年が窺うような眼差しで問いかけてきたので何でもないと首を振ることで答えた。納得のいかない顔つきで、それでも自分の回答を尊重する姿勢を崩さない少年は今回もまた引き下がることにしたのか、軽く頷き洗い場へと向かった。そうしたところで再び新たなる視線を感じ、そちらへ目を向ければ矢張り其処には全てを見透かすような深い深い翠の双眸。師弟揃って不審がられてしまう程、自分はおかしな顔つきをしていたのかと苦笑を深めて喉元の毛をくすぐってやると、黒猫はごろごろと喉を鳴らしながら近寄り、定位置とばかりに膝の上で丸くなった。
はて、今日は一体何の日だったか。
ざああ、と蛇口から出る水の音が耳を打つ中考え続ける。時折少年が水切りに食器を置くかちゃりといった音が室内に響いた。

「・・・鳴海」
「何かなライドウちゃん」
少年の呼びかけにはっとした。すっかり考え込んでいたらしい。内心慌てながら笑いかけると、もうそんなものには引っかかってもくれなくなった少年は平然と問いかけてきた。
「矢張り何か気にかかることがお有りなのでは、」
「だから、何でもないってば。ただ何かあったような気がして、でも思い出せなくて、」
「悩んでおられる、」
「そ。そういうことです」
「成る程」
得心した顔で漸く頷いた少年に安堵した。そうして頬杖をつき、白い、最近丸みの取れてきた頬のラインを下から睨めつけるように見詰めながら眉を顰めた。
「っていうかさぁ。お前なんでそんなに食いついて来るわけ、」
「貴方御自身は意識していらっしゃらないのでしょうけれど、先程の貴方の眼差しは俺の居る此処ではない、遠い何処かに向けられていたように見受けられましたもので」
つい不愉快になりまして。
拗ねた口調でそう問いかけた自分にひたとその眼差しを向け、少年は逡巡することも無く答えを寄越した。つまりは恪気か、と理解すると共に思わず呆れる。
「只単に考え事をしていただけでそんな仕打ちかよ・・・」

「単なる考え事であるようなら、俺だってこんな無粋な問い掛けは致しません」
「はぁ、どういう意味だ」
「どうもこうも。‥‥はっきり口にせねば分かっていただけませんか、」
要領を得ない少年の言い分に得心がいかず。より明確な答えを促すと、少年は言い辛そうに言葉を紡いだ。
「貴方が手紙を残して失踪なされる以前にも、御一人で良く考え事をなさっておられたことを‥‥覚えておいでですか、」
「あ、ああ勿論」
突然雲行きが怪しくなった話題に思わず背筋が伸びる。
件の一件を持ち出されるとどうにも居心地が悪い。しかし全面的に自分が悪いということも重々承知しているので、甘んじて非難を受けるしかないのがまた遣る瀬無かった。しかし此処最近に関しては此の手の話題もすっかり御無沙汰であったので油断していたのだが、どうやら忘れていた訳ではなかったらしい。万事都合良くはいかないものだなぁと思いながら、しかし何を言われても対応を誤らぬよう、慎重に少年の言葉の続きを待つ。
「先程の貴方の眼差しには、その折に浮かべていらしたのと同じものが宿っておられました」
「――――え、」
「ですからつい。‥‥詰まらぬことを言ってしまい、申し訳ありませんでした」
それでは俺はこれから屋上へ向かいますので、失礼します。

そう言って一礼した後、こちらが返事を返す暇もなく少年はするりと逃げてしまった。
しかし其れを悔しがることも無く、指摘された内容に虚を突かれ、呆然とする。
最近心身共にすっかり大人びてきた少年は、同時に其の観察力も格段の成長も見せており。其れを認めていた己自身の判断と、洒落にならないであろう類の話題には件の一件を決して持ち出そうとしない少年の生真面目さを考慮に入れれば、彼の言い分は其れなりに信頼すべきであるという結論に達せざるを得なかった。
固まった自分の膝の上から一部始終を見聞きしていた黒猫は、床へとすっと飛び降り。にゃあと鳴いた後キッチンから出て行ってしまった。
すっかり取り残された形となった自分は其処で漸くはたと正気に戻り、湯飲みを流し台の上に置いた後、考えるのは着替えを済ませてからだと思い直し自室へと向かった。

何時ものように英国製の背広を身に纏い、何時ものようにだらけた態度で所長用チェアに座り。頬杖をついて壁にかけられた月割りの暦表を眺めながら考え続ける。
心配してくれている少年には悪いが、矢張り答えが出ないことにはどうにも落ち着かないのだ。
先程よりはヒントが与えられた形になっているので、全くの濃霧状態からそれなりに先が見えるくらいには道筋が見えてきているように思われる。が、しかし所詮其処まで。どうあったって先に進まない己の頭脳に嗚呼もう俺ってば本当に年なのかしらん、と幾分情けない気分に陥りながらも気分転換にと手を伸ばしラヂオの電源を入れた。

暫くざぁざぁと砂の流れる音がしたが、やがて巧くどこかの局へと繋がったようだった。うららかな日差しに誘われるように、ゆるやかで心地良い音楽が流れる。瞼を閉じ、静かに聞き入っていると、何時になく早起きさせられたお陰で自然うとうとし始め、危うく本格的な眠りへと誘われかけたその時、遮るような調子で平坦な男性の声が耳を打った。

『只今ヨリ、本日之帝都之天候ヲ御知ラセ致シマス』

「・・・・うぉっと、危ねェ。まぁた居眠りするところだった」

かくり、と落ちかけた顔を持ち上げ頭を振る。

こんな日にこんな曲を朝っぱらから流すなよなぁ労働意欲を削ぐってモンだぜ、とどの口が其れを言うのかと、即座に突っ込みが入れられそうなことをぼやきながら帝都新報を手に取る。紙面を賑わす珍妙な事件に呆れ、頁をめくる。遠くの方で何やら少年がごそごそしている音がするが、下手に手を出しては何を言われるか分かったものじゃないので敢えて素知らぬ振りを続けた。

「おっ、おおお・・・・いいなぁこれ」

下の広告欄に目を留め、思わず声が弾む。三越本店食堂内で出されている『御子様洋食』の宣伝だ。かわいらしい絵つきで内容が描かれている。富士山型のライスの頂上には三越印の小さな旗。裾野に広がるは小さなコロッケとハム、そしてスパゲッティ。

「いいなぁ、コロッケはやっぱクリィムコロッケかなぁ。いや、子供向けだからポテトかもしれん。・・・・興味あるけど流石にこれは頼めねぇな」

苦笑して諦める。全く、昨今のお子様は恵まれたものだ。自分の時代には、こんな子供向けの小粋

なメニュウなど存在しなかった。
　此処へ来たばかりの、全くの世間知らずであった頃の少年ならば巧く騙して注文させることも可能であったかもしれないが、最近ではとんと知恵付いてきて自分の悪巧みには中々引っかかってくれなくなった。寧ろ下手に騙そうものなら、閨でどんな復讐をされるか分かったものじゃない。考えただけで腰が痛くなりそうだった。
　後ろ髪を引かれつつ上の記事欄に目を走らせていると、長々と続く天気予報にすっかり飽いていたラヂオの音声の一部が不意に耳に入った。
『‥‥夜間之天候ニ関シマシテハ概ネ雲モナク、月モ良ク見エルコトデショウ‥‥』
　びくり、と全身が震えた。
　今何と言った。
　視線は既に字を追っておらず。虚空を見据え、頭の中で一気に晴れていく霧を更に振り払い結論への最短距離をひた走ることに集中する。やがて解答が導き出されると、その内容に思わず片手で半面を覆い、呻き声が洩れた。
「‥‥そうか」
　もう一方の手でぐしゃりと紙を握り潰し、前傾していた身体をどさりと椅子の背に乗せると、突然加えられた加重にぎぃと悲鳴を上げた。
　そう。‥‥今日というこの日は、

彼にとって【言葉】というものはあまり意味を成さないのだ、ということに気付いてから暫く経つ。

生きてから此の方、【言霊】というものが日々の生活の上でひどく特別な位置を占め続けていた自分は、自然自らも言葉を発する際には注意を払うこともあって、彼のそんな性分を左程気にもしておらず。また口下手なことも加わり、こうして想いが通じ合った今でも、女のように細々とした言葉を求めてこない彼に対し寧ろ感謝していたくらいなのだが、ある程度世の中というものを知るようになった頃から、気にはなっていた。たかが十年の半ばと少ししか生きては居らず、それもまた大半の時を葛葉の里という閉鎖した空間で過ごしていた自分には、彼が何故そうなるに至ったか、想像することすら出来ないでいたのだけれど、あの一連の事件の最中で、僅かではあるが彼の前歴を耳にし、また彼自身にも其れを半ば肯定されたお陰で、未熟ながらも其の理由を察することが出来た。

【言葉】は、彼にとって何よりの道具であったのだ。

其れは時として目的のものを得る為の術であり。相手を陥れる武器であり、自らの身を守る鎧であり。また周囲を欺く為の仮面のひとつだった。

当然、望まれれば望まれるがまま、どんな言葉であっても吐いたであろうし、必要であればどんな事でも言ってのけただろう。

だからこそ彼は、そういった任務から開放され、【鳴海】となった今では、其の反動からか自分だけではなく他の人、例えば彼と最も親しい佐竹さんや竜宮の女将さん、或いはタヱさんといった、言葉ではあれやこれやと言いながら、しかし態度や雰囲気によって親しみや優しさを伝えてくれる相手を、より贔屓にするのだ。

そうして観察してみると、其の洞察は成る程、我ながら正しいように思えてくる。
たとえどれほどの美女にどんなにしどけない姿で、甘い声と共に何を囁かれようとも、外観はどうあれ、彼の内面は一向に揺らいでいない。しかし表面上は機嫌良く振舞うためか相手の方は自然いけたと思い込み、しめしめとばかりに食指を伸ばしてきたりするのだが、核心に触れるというその時になって初めて、彼からぴしゃりと跳ね除けられるのだ。
深川に顔見せに行った折、共に湯船に並んで浸かりながらそういったことを佐竹さんに伝えてみれば、彼は何も言わず静かに笑い。その後舎弟さんたちが見守る中、自分の背中を流してくれた。そんなことをされたのは正直初めてで、どうにも身の置き所に困ってしまい。目上の方にそのような事をして頂く訳にはと抵抗してはみたものの、時として口の達者な彼と同等に、或いは言い包めることすらしてしまう人に対抗できる筈もなく。普段お前が組み伏せとる相手は目上とちゃうンかと一笑に付され、関係を知られている相手だということは元より充分に承知の上ではあるが、それでもこうまではっきりと言葉にされると流石に恥じ入るより他なかった。俯く自分の背を流し終わった後、佐竹さんは微かな声で囁いたので、恐らく彼の舎弟たちは耳にすることはなかったであろう言葉。
お前はそうなってやるなよ、という其の言葉の意味するところを、拙い形でも何とか理解しようと思う。
だからこそ。
ぱん、と両腕を広げ洗い上げたばかりの真っ白なシーツを広げ、屋上に設置された物干し台にひっかけ。両端を木製の洗濯挟みで留め、細かい皺を叩いて伸ばした。

だからこそ、自分は言葉というものを何より大事に扱おうと思う。【ライドウ】としての任務上、止むを得ず其れを道具として使わねばならないこともあるだろうが、其れでも彼に対してだけは。

其れがたとえ彼自身に対する好意の言葉であっても、軽々しく口にすべきではないと思ったし、そう心に決めた。

久しぶりに感じるすっきりとしたそよ風に洗濯物が翻る様は気持ちが良かった。自然口元に笑みが浮かび、深く呼吸をして空を仰ぐ。

そんな爽やかな朝の情景にあって、しかし思い浮かぶは先程の彼の姿。

少々様子がおかしかった。

朝起こした時には何時もの寝汚い彼であったし、シーツを抱えバスルームの前を通った時には普通に髭を剃っていた。食器を片すためにキッチンへと行った折には目付けの黒猫と共にぼんやりと煎茶を啜っていたのも、これまた何時もの情景であったのだが。食卓の上を拭き清め、頭を上げた時には――ああなっていた。

ふぅ、と溜息を吐き、頭を振る。

何れにせよ言いたくない、或いは言い出せないことがあるならば、本人が其れを告げる決心をつけるまで、ある程度は待って然るべきだろう。ある程度、と期間を設けることにしたのは過去の事例があったが故だ。彼の自主性を重んじ過ぎた結果詰まらぬことを延々と気に病まれ、随分とお預けを食らってしまっていたことが判明した時の、あの腹立たしさとやりきれなさを再び味合わされるのは正直もう遠慮したかった。

どの程度待ってやるかについては今後の彼の様子次第、ということにしておこう。

「あー・・・、ははは、参ったねこりゃ・・・」

あんなに大事に仕舞い込んでいたつもりだったのに、何時の間にやら忘れかけていたということが衝撃であったし、しかし忘れてしまっていることに何処かしら安堵している自分もまた存在し、其の事実がまた新たなる衝撃を生んでいた。

ずるり、と椅子から身体が滑り、新聞がぱさりと音を立てて床へと滑り落ちた。其れを拾うでもなく空いたもう一方の手でも半面を覆い、明るい外界から一時全てを遮断する。

これが生きるということか。

脳裏をよぎるは只思い出の中のみに生きる存在となってしまったあの人の記憶。

話の途中で、優しく微笑みながら、時折己の頭を撫でてきた其の手の平の温かさ。

嬉しいような、腹立たしいような。些か複雑な気分に陥りながらも其の手を跳ね除けられず、ただ諾々と受け入れた自分。

しかし丸っきりの子供扱いはあまりに酷いと、躊躇いがちに実年齢を申告した時の、あの驚かれた顔。次いで愉快そうに笑われて、そんなに笑わずともと拗ねた気分になりながらも、其れでもあの時の自分には其れが何よりも、純粋な喜びをもたらすものだったのだ。

貴方には敵わないな。

くしゃり、と髪をかき上げ苦い笑みが口元に浮かび。紙煙草を咥え、燐寸で火を点しながら考える。

全く、どうしてこうなってしまったのやら。
これでも自分はかつての自分にとってのあの人のように、あの少年の心の支えになってやりたいと思っていた筈なのに。何処をどう間違えたか、こんな関係に収まってしまった。元より、自分如きが目指せる人物像でなかったのかもしれないが、それにしたって見当外れもいいところだろう。
これも積んできた徳の違いか。
何れにせよ、最も救い難く罪深いのは、なんだかんだとぼやきつつも今の此の関係に幸福感を覚えている自分であることは間違いない。
嗚呼全く。自分のような人間があんないい子と懇ろになっちまって。地獄に落とされても文句は言えないやね。
‥‥まァ、それでもいいさ。
ぷかり、と煙を吐き出しながら幸福そうに微笑んだが、再び苦笑へとすり替わった。
以前よりは大人びてきたとはいえ、まだまだ子供な部分が色濃い少年は、今頃屋上辺りで様子のおかしかった自分のことを考え、一人悶々としているのではなかろうか。
しかも外見上はあの無表情で。
容易く目に浮かぶ其の様子にくくくく、と笑いながら床に落ちたままの新聞を広い上げ、畳んでデスクの隅に置いた後。さぁどうしてくれようかと考えを巡らせた。

籠を洗い場へ戻し、よしと気を入れ直して社内へと向かう。上着は脱いだまま、捲り上げていた襯衣の袖を直し釦を留めた。学帽の位置を正しドアノブに手をかけて、失礼しますと口にしながら扉を開ければ、彼は先程とは打って変わってにこやかに微笑みながらこちらを見ていた。一体何があったのか、腑に落ちないながらも室内へと足を踏み入れる。不審げに見られていることなど知っているだろうに、彼はそのまま無言で手招きした。

意図が全く読めず、不忠議そうな色をその目に浮かべながらも、自らの上司であり情人でもある人物の要望に従う。目付けの其れと同じく極力音を立てずにひっそりと所長用デスクの真正面に近寄れば、彼はそうではないとゆるく首を振り、手を僅かに横向きに逸らし更に手招いた。其の動きにつられるようにデスクを回り込み椅子に座ったままの彼の人の傍らに人一人分の距離を置いて佇むと、その位置は漸く意に叶ったのか。彼の人はこちらに目線を向けることなく穏やかに微笑んだ。

この人は良く笑う人であるけれども、そんな、見る者の心に染み入るような微笑を見せることは意外に少なく。少々の驚きを感じながら直立する。すると、彼はデスクについた右手に乗せていた顎を上げ、それと同時にだらりと肘掛に乗せたままであった左の腕をゆるりと動かし、傍らに呼び寄せた自分の腰に巻きつけた。

思わずびくりと震える自分の反応に気付かない筈のない彼の人は、そんなことは知ったことかとばかりにその意の向くまま更に自分を己に引き寄せる。彼に逆らう意思など元よりない自分は、そのまま決して強いとは言えない力の向きに従って二、三歩前に進み、肘掛に密着するまでほんの僅か、といった位置まで移動した。腰を取られている状況に加え、更に僅かに空いた空間を通じて体温すら感

じ取れるまでに縮まった距離に鼓動が跳ねた。
どぎまぎした心を落ち着かせながら、突然の振る舞いの意味を知るために彼の人の視線を捕らえようとしても、肝心の其れは斜め下方に逸らされたまま。座った状態の彼にそうされては突っ立つ自分にはどうしようもなく。顎を掴んで捕らえるには、場が其れを許さないものとなっている。
こういった雰囲気づくりに関する彼の能力は大したものだと多少の悔しさを抱いていると、腰に巻かれたままだった彼の左腕に僅かに力が篭った。その動きに視線を下に向けると、彼の頭部が腹部に押し当てられた。ぎょっとした。
直接肌を触れ合わせるよりも、こうして中途半端な状態で触れ合う方が、より如何わしい気分になるのは何故だろう。
反応しかける己の気を逸らせる為に敢えて他所事を考える。
凄まじい葛藤に耐え忍ぶ己の内面など全く存ぜぬであろう彼は、どこかしら眠たげな、うっとりとした声で、なぁ、と話しかけてきた。
「頭、撫でてくれないか。優しく、さ」
どきりとした。
次に、どうしてばれたんだろう、と焦った。
想いを自覚し、そして想いが通じた今でも、デスクの上で、或いはベッドの上で微睡む彼の、色の薄い柔らかな巻き毛を眺める度、そのような衝動が我が身を襲い続けていた。だが寝癖のついた其れを撫で付けるのとは訳が違う。幾らなんでも年長の男性を捕まえてそのように扱っては流石に無礼に

当たると、渾身の理性で以って伸びようとする腕を押さえ込み、振り切るように其の場を後にするか、或いは寝入ることが多かった。

しかしそういった有様を彼の前で晒したことは只の一度も無い。幾ら彼の観察眼が優れているとはいえ其れを見抜くだけの材料はなかった筈なのだ。其れなのに何故、と混乱する頭を抱えていると、一向に返って来ない返事に焦れたのか。彼はもぞりと身動きした後片目を開き、眠たげな声をあげた。

「・・・・駄目か、」

「は、い、いいえ、とんでもない。喜んで」

つい先程まで身を襲い続けていた不埒な衝動を必死に抑えていたことに加え、自らの疚しい願いまで見抜かれていたのかと焦った状態のまま声を出した所為で、随分とおかしな声が出てしまったが、普段なら気が済むまでとことん揶揄い尽くすであろう彼は、じゃあお願いと言っただけで再び自分の腹に顔を埋めてしまった。どうにも調子が狂うな、と内心ぼやきながら、しかし深く考える必要はなさそうだと思い直し。彼の肩を抱いていた片方の腕を外してゆっくりと彼の頭に手を這わせた。夢にまで見た其の行為に、喜びで心が震えた。

嗚呼、矢張りふわふわして気持ちいいし、それに、――かわいい。

ほくほくとした心持でそのままゆっくりと撫で続けると、漸く与えられた其の感触に満足したのか、彼は大きく息を吐き出し。猫の子が親に甘えるようにすりすりと腹に擦り寄ってきた。

これには正直参った。

果たして今の自分は願いが叶って幸福なのか、焦らされ続けて不幸なのかと考えを巡らせながら彼

の頭部を撫で続けていると、件の彼があのさぁと話しかけてきたので思考を中断し目線をそちらへ向ける。
「‥‥あの人もさ。時折そうやって、‥‥俺の頭を撫でてくれたんだ。まるで、子供にするみたいに」
がつんと頭を殴られたような衝撃が走った。
其れって酷くないか。
つまるところ今の自分は彼にとって誰かの代わりなのだろうか、と思わず短絡的な思考に走った。だが手が止まったことで彼も其れを察したのか、それまでの眠たげな雰囲気を一瞬で吹き飛ばし、嗚呼違う違うと慌てて否定しながら、腰へ回していた両手に更に力を込めぎゅうっと抱きつき、逃げられないよう確り拘束してから付け加えた。
「そうじゃなくて。そうじゃなくてさ、‥‥懐かしく思ったのは事実だけど、俺は他の誰でもない、【お前に】撫でてもらいたいと思ったの。其処は誤解しないでくれ」
嗚呼もう何て言ったらいいんだ、と本気で焦る彼の困惑が直接肌を通して伝わって来て、多少面白くはないものの仕方なしに納得してやり、手を再び動かし始めた。誤解が解けたことを察したのか、彼はほっと溜息をつき。再び頬を摺り寄せながら続きを話した。
「まぁ其れは、青二才だった俺が、あの人の言いたいことをさっぱり理解できなかったときによくやられたんだけど」
丸っきりの子供扱いに、そりゃあ面白くなくて。でも、

「何か、心地良くってさ。…抵抗しきれなかったんだよねェ」
其れを聞いてはっとした。
自分も、そうだった。
知り合って、親しくなって。何時しか避けられるようになってしまうまでの間、彼はよく自分の頭を学帽越しに撫でてくれた。面白くはなかったが、不思議と其の感触は心地良かった。
「左程意識していたわけじゃなかったんだが。お前さんに対して、俺はあの人と同じことをしていたんだなぁ、とか」
それだけじゃなくて。
「本当に何気なく、人間らしいことを色々教えてくれたのも、あの人だったんだよなぁとか、ちょいとばかり思い出しちゃってさ」
様子が変だっただろ俺。
苦笑してそう締めくくられた彼の発言に、ええ、と控えめに肯定を返す。
「ちょっとだけ、らしくもなく感傷的になりました。…だから、あまり気にしないでくれ。こうしてお前に甘えてれば、其の内浮上するからさ」
穏やかに微笑んで再び擦り寄る彼の人の頭を抱え、撫で付けてやりながら、過敏になり過ぎていた己を反省し。次に行う予定だった掃除を潔く諦めて、この人の気が済むまでこうしていよう、と思った。
あーでも。

可笑しそうに笑う振動が腹に伝わる。
「ちょっと其れもお前には酷い話かなぁ」
「何故です」
眉宇を寄せて問いかける自分に、彼は人の悪い笑みを張り付かせて目線を合わせた。
「結構反応してただろ、抱きついた時」
「え、」
誤魔化せたと安心しきっていた事を言い当てられ、徐々に赤面し始める自分を、更に上機嫌な顔で覗き込む彼から目線を外し、うろうろと辺りを彷徨わせながらどうして、と問いかければ愉快そうに笑われた。
「普段はひんやりするくらい体温低いくせに、抱きついた矢先からどんどん熱くなるんだもんなぁ」
あー反応しちゃってるな、かわいそうかな、と思ったんだけど取り合えず今は甘えておきたかったからさぁ、
「気付いてない振りしてました。御免ね」
「いえ、とんでもない。・・・こちらこそ、即物的な人間で申し訳ありません」
帽子を引き下ろし謝罪する自分の反応が可笑しかったのか、朗らかな笑い声を上げながら彼は続けた。
「まぁ実際の話。おっぱじめようにも俺のベッドもお前のベッドも、シーツは洗濯しちまってるし布団も屋上に干しちゃってるしなぁ、」

「いえ、替えのシーツがありますから大丈夫です」
それに毛布も。
即座に返された答えに驚いたのか、彼はぱちぱちと瞬きを繰り返した後、じゃあなんで直ぐに敷き直さなかったんだと尋ね。其れに目線を彼方へ向けながら答えた。
「そうしたら即座に貴方が二度寝なさるだろうと思ったからです」
「そりゃあ・・・、そうねぇ」
反論が思いつかなかったか。そう言って笑いながら受け入れてくれたことに喜びを感じ、腕の中で微笑む彼を抱きしめ直した後、では少々お待ちくださいと言葉を残し。いそいそと扉を開けてみれば直ぐ其処に佇んでいた自らの目付けと目が合った。だらしなく緩んだ表情を晒している自覚もあった分動揺した。しかし口煩い彼から何の言葉も発せられなかったのをいいことにそそくさと立ち去り、浮つく心を宥めながら彼の私室へと向かった。

全く、まだ昼にもなっていないというのに二人して何を盛ってるんだか。
苦笑して少年が立ち去った扉方向へ目を向けると、開け放たれたままの其処には黒猫がちょこんと座っており。そういえば出しなに少年が一瞬硬直していたのは、ははぁそういうことかとつい笑ってしまった。
黒猫は少年が歩み去った方角を些か呆れ気味の横顔で見遣っていたが、ごちゃごちゃと説教をする気にもなれぬらしく。腰を上げ、すたすたとこちらへ向かって歩み寄ってきた。腰を上げ彼の方へ近

寄り、抱き上げてやると抵抗されることなく身を任された。にゃあ、と鳴いてじっとこちらを見詰める目線に、彼にも心配をかけていたのだなと思い苦笑した。
「あの人と俺が最後に会話を交わしたのが、」
黒猫に頬をすりつけ、大きな耳に囁く。
「――――数年前の、今晩だったんだ」
ライドウにゃ内緒な、あいつ直ぐやきもち焼いちゃうから。男同士の約束だぜ。
片目を瞑りながら黒猫にだけ本当のことを教えてやると、彼は僅かに目を見張った後、ナァと一声鳴いて了承してくれた。身を捩る彼から手を緩めてやればするりと抜け出し。窓辺に飛び乗り、もう一声鳴いた後さっと其処から姿を消してしまった。
どうやら今日は大目に見てくれるつもりらしい。
今からだと昼飯どうするんだろう、と心配するが、あの黒猫のことだ。どうにかしてしまうに違いない。尤も、其れは彼の人間としての矜持と引き換えの行為となってしまうのだろうが。
ぽりぽりと頬を指で掻きながら、其れでも譲ってくれた彼の心優しさに頬が緩む。窓辺に寄り、良く晴れ渡った空を眺める。――嗚呼、いい天気だ。
「鳴海、支度が整いました。‥‥こちらに」
静かに忍び寄った少年に背後から抱き寄せられ、其の気になった彼の身に纏う婀娜っぽい雰囲気に飲み込まれかける。つい先程までとは全く異なる自らの心の有様に、我ながら現金なことだと思いながら、しかし心地良い其れを振り払う気になれず。歳の離れた情人と共に連れ立ち、扉に『CLOSED

〜休業中〜』と書かれた札を下げ。微笑を交わし逸る足を押さえ自室の扉を開いた。

扉を開け、先程は追い立てられるように後にした自らの寝床を見れば、其処にはぱりっと糊を利かせた真白のシーツが皺一つ無く敷かれており。枕元のパイプ部分には邪魔にならぬよう毛布まで掛けられていた。

あの短時間の内に其れらの用意を整えてみせた少年の手際の良さに感服する。

「・・・お前なら今直ぐにでも、帝国ホテルのボーイとして雇ってもらえるよ」

「いいですね。貴方に愛想を尽かされるようなことがあったら、その時にでも考えてみますよ。若し、万が一に、そんなことがあるとしたらね」

以前であれば戯言一つ飛ばすにしても、内容によっては即座に顔色を失い。少年のそんな有様を見たこちらが逆に慌てふためく、といったことが通例であった筈なのだが。

今じゃすっかりあしらわれちゃってるよ此の俺が。

切れ長の目を細めて笑いながらそう返した少年は、揺らぐ気配すら見せず。つまんないのと呟き尖らせた自分の唇に軽く吸い付きさえした。

目を合わせ二人同時に笑い、邪魔くさい少年の帽子を放り投げる。

此処で互いの衣服を寛げるのも随分と手馴れてきた。しかし外さなければならない釦の数は少年の制服の方が遥かに多く。少しでも手間取ろうものなら、先に剥き身にされた己が身に与えられる感覚を堪えながら続きをやる羽目になる。初めてそのような目に遭わされた時の悔しさと少年の得意げな

顔といったら。思い出すだけで今でも腹立たしさを感じる程だ。しかし今日ばかりは件の少年が上着を身に着けていないお陰で、そんな屈辱的な思いを味わわされずに済みそうだと密かに安堵する。
少年の身を包む襯衣の釦を外しながら違和感を抱き。よくよく改めて少年を見遣ると、気の所為だろうか。何時もより目線が上の方にあるように感じた。尤もそれは未だ見上げるようなものではないのだが、其れでも確かに昨日に合わせた位置よりは一センチ少々はずれているようだった。
「ライドウ」
「なんです、」
「・・・お前ひょっとして身長伸びた、」
隠し切れない不快感を滲ませながら眉宇を顰める。突然そう問いかけられた少年は一瞬戸惑い、目を瞬いて僅かに小首を傾げた。そうして顔にかかった前髪をかき上げながら思い当たる節でもあったのか。嗚呼、と呟いた後その薄く形の良い唇を開いた。
「そういえば夕べ、全身の節々が妙に痛んで。・・・時折、目が覚めてしまいました」
「うわぁ・・・。そうかぁ、そういやお前そういう歳だもんなぁ。多分伸びてるよ、今度計ってみな」
嗚呼畜生厭だなぁ、と思わず本音が口から漏れ出でる。自分のベルトに手をかけていた少年が顔を覗き込んだ。態と目線を合わせず自分もまた少年の其れへと手を伸ばし、小さな金属音を立てながら外していると、少年は止めていた手を再度動かし始め。
「・・・どうして、」
静かに問いかけてきた。口元が僅かに、笑みを噛み殺したように歪んでいる。

ん〜、だってさぁ。
前を寛げた襯衣の隙間から覗く、少年の白い半身についた筋肉の形をなぞるように手の平で撫ぜ、くすぐったそうに表情をゆるませる少年の額にかかる前髪をもう一方の手で掻き分けてキスを落してやりながら呟く。
「お前が俺よりでかくなっちまうと、」
互いの肩にかかった襯衣を落し、半裸の状態で向かい合う。其れと意識して見て取れば、少年の身体を覆う筋肉の形は以前と変わらないものの、其の骨格は確かに少年期の其れを脱しつつあった。
うわぁもっと厭なことに気付いちゃったなぁと、抱きついてくる少年を受け止め、其の見事な筋肉の弾力を自らの身体で楽しみながら続きを口にする。
「‥‥こんな風にお前を抱きしめて、可愛がってやれなくなるんだぜ」
つまんないじゃないか、そんなの。
首筋に埋められていた少年の頭が上がった。
「‥‥そんなことで嘆いておられるのか」
おかしそうな響きを以って放たれた科白にかちんときて、そんなこととは何だ、と少年の方へ顔を向けるが、其処で出くわした彼の大人びた笑顔に浮かんだ文句が奥に引っ込む。
「其れはつまり、」
一瞬の隙を突かれズボンと下着を一方的に剥ぎ取られる。少年の突然の行動に泡を食う暇も無く寝台へと押し倒された。

強引な振る舞いに抗議しようと肘を突き上体を持ち上げれば、少年は自分の不興など何処吹く風といった顔で自らの身に纏っていた最後の衣服を脱ぎ去り、寝台に足をかけぎしりと音を立てて覆いかぶさってきた。

少年はそのままずいと迫り、きりりと切れ上がった目で今にも互いの鼻先が触れんばかりに間近に自分を見据え、脇から手を差し入れてきた。己が為そうとしていたことも忘れ、つい反射的に左腕で少年の肩を抱き、右の腕で彼の頭を包む。少年の心地良さそうな溜息を聞きながら揃って寝台に倒れ込んだ。

「俺の体格が貴方の其れを上回った時点で、貴方は俺をこのような形で抱き締めては下さらなくなると。そう仰っておいでなのでしょうか」

思いもよらない内容に驚愕した。

「え、‥‥いや、そんなことは、」

「ない、と、」

「‥‥ああ、勿論だ」

幾度か其の状況を想定し、間違いないと確りと頷き返し。其れは良かったと嬉しそうに擦り寄る少年を抱き締める。次第に早まる互いの鼓動を互いの薄い襯衣越しに感じ取りながら、しかし未だ言い足りないことがあったので少年が本気で懐いてくる前に急いで付け加えた。

「‥‥だが、お前の肩に手を回すのにも骨が折れるようになる日が近そうだなと思わされると、そりゃあ憂鬱にもなるさ」

今ですら辛うじてってくらいなのに。
間違いなく自らの体格を越してしまうであろう少年の未来の姿を思い描き、口を尖らせながら拗ねてみせる自分を見て、少年はおかしそうに笑った。
「貴方は本当につまらないことを気になされる方だな、」
再び啄ばむような口付けを落してから少年は続けた。
「肩が駄目なら、他の場所に腕を回せば良いだけの話じゃないですか」
首でも背でも。何なら腰でも構いませんよ。
そう言って、一見邪気無く微笑みかける少年の顔を目を眇めて見返した後、其の手に乗るかとふいと顔を背けた。
「首や背は兎も角。――腰だけは絶対御免だね」
「何故」
会話を交わしながら少年は身体を離し。宙に浮いた形になっていた自分の足を抱えて寝台に乗せた後、改めて覆い被さってきた。
首筋に顔を埋め、時折舌を這わす濡れた感触にくすぐったさを感じながら、分かりきったことをと鼻を鳴らす。
「俺が自分から腰を押し付けようものなら、ここぞとばかりに暴走するつもりだろうが」
俺がそんなつもりで抱き寄せたんじゃないと分かっていてもだ。
これまで自分に対してだけは殆ど発揮されることの無かった、少年本来の気質であるのだろう其の

人の悪さは、このような関係に収まってからというもの、自分に対しても確り適用され始め。弱い箇所を其れなりに把握されてしまっている今となっては下手に何かを仕掛けようものなら、後でとんでもない長丁場に付き合わされる羽目に陥ることも珍しくは無かった。活力の有り余る少年には大したことがなくとも、付き合わされる自分には堪らないものがある。

「まるで俺だけが悪いような言い草だ」

否定はしませんが。

やっぱりそのつもりだったかと溜息をつく自分の身体の線に沿って手を這わせながら、全く悪びれる素振りも見せず少年はしれっとした顔で肯定した。

「・・・しかし、貴方だって随分と悦んでおられたではありませんか」

自分御一人だけ被害者のような顔をなさるのは、感心できませんね。

言い終えると同時に突然少年の手で包み込まれ、赤面する暇も無く身体がしなった。いとおしむ様な指の動きに反応し膝が震える。

「・・・それに、」

乱れ始める呼吸を整えようと深く息を吸い込み、吐き出す自分の顔にもう一方の手を沿わせた少年は、背けようとする動きを押さえ込み遠慮なく目を覗き込んできた。

「貴方が幾ら厭がろうとも。俺は早く大人になりたいのです」

「・・・何故、」

急ぐ必要は無いだろう。

先を強請るように揺らめき出した己が腰の動きはそのままに、喘ぎではない言葉を口にする為に片手で少年の肩を握り締め、もう一方の手を少年の後ろ首にかけながら其の顔を引き寄せる。急所を押さえられた形になった少年は、其れでも自分の手を振り払うような動きを見せなかった。

薄っすらと染まった目尻と、欲の浮かんだ眼差し。そして、自分が立てた爪の痛みを堪えているのだろう、悩ましげに顰められた眉宇。普段は周囲の者に涼やかな印象を抱かせる少年は、今この時にしか目にできない表情を浮かべ、自ら顔を寄せてきた。

「――――俺も。今貴方が俺にしてくださるように、‥‥貴方を包み込むように抱き締めて差し上げたいんだ」

唇に触れるか触れないかの位置で吐き出された少年の想いに、自分もまた顔を寄せることで応え、其れらが合わさると同時に口を開いた。僅かの隙間も空かぬよう、少年の頭を両手で引き寄せ、舌を絡ませあう。

其の間も少年の片手は休む事無く蠢き続け、其処から這い上がってくる快楽に堪らず腰が逃げを打つが、察した少年のもう一方の手で固定され、指の腹で先端部を撫でられた。堪えきれず合わさった唇を引き剥がし、横を向いて切れ切れに呼吸を吐き出す。

先程の科白に返答をしようにも、今のような状態では口を開いたところでみっともない声しか上がらない。

快感に喘ぎながら何だかなぁ、と思うが、其れもまた良いだろうとも思う。今日はすっかり先手を取られた形になってしまったが、何より今日は甘やかすというよりひどく甘えたい気分だったので、

満足することにした。

月明かりでもなく洋燈の薄明かりでもない、日の光が窓掛けを通して室内に満ちていた。

そんな、普段とは異なる雰囲気に全く惑わされなかったと言えば嘘になる。

だが常であれば競い合うように睦み合うことを好む此の人が、今日ばかりは其の悪戯に動き回る手を休め、ただ自分に為されるがままに身を委ねきっている此の現実に、愛おしさと、ほんの僅かな切なさを覚えた。

彼が先程探偵社内で自分に対して口にした理由も、無論偽りではなかろうが、しかし其れだけでもないだろうことも窺い知れた。

たとえ世辞でも世間様に向けて胸を張れるとは言い難い内容であっただろう任務の中でも、最も後ろ暗いことに手を染めていたのであろう彼の、誰よりも大事に想っていた存在。

尤も其れはあくまでも当時の話で、今この時にあっては此の自分こそが彼の中で一等の位置を占めているという自信はある。だが、既に彼岸の人となった人が相手ともなると流石に厳しいと思うこともあった。

例えば今日のような出来事に遭遇してしまうと、普段身に纏っている冷静な仮面など全て引き剥がし。過去を、その人を想って顔で笑い心に涙する彼の意識を力ずくでもこちらへと向けさせたいという願いが胸中を駆け巡ることも珍しくは無い。

しかしそのような欲を言い出せば際限が無いこともまた事実。今はただ、辛い時には自分という存

在を忘れずにいてくれて、尚且つこのように頼ってくれ始めただけでも良しとすべきなのだろう。少なくとも、彼の人に一人悶々と苦しまれるよりはずっとましなのだ。其れが即ち己が恪気に苦しむということを意味するのだとしても。

与えられる感覚にだけ集中している彼は先程からずっと目を閉じており。自分のそんな心境など文字通り目にも入っていないのであろうことは幸いだった。

我ながら随分といじらしいものだ、と心の端で自嘲の笑みを浮かべながら、再び縋りついてくる彼の腕に引き寄せられるがままに上体を倒し、汗ばんだ首筋に顔を埋め、時折舌を這わせては逐一反応を返してくれる彼の様子を愛でる。

普段は忌々しいほどに良く回る口が、喘ぐ声や吐息を洩らす為のものとなるだけで、随分と印象が変わるものだ、と感心していると、流石に此の距離では他所事を考えていることに気付かれたか。彼は腹立たしげに呻き声を上げたかと思うと突然目を見開き、鎖骨にがぶりと噛み付いてきた。

「‥‥っ痛ぅ、」

容赦のない攻撃に堪えきれず声が洩れた。

屹度暫くは跡が残ってしまうだろうと思わせる程の痛みに顔を歪ませながら彼へ視線を向けると、睨みつけるような上目遣いのまま歯に挟まれた箇所に舌を這わされ。同時に動きを止めてしまった手に自ら腰を擦り付けてきた。

焦らす楽しみはなくなってしまったが、これはこれでよい見物でもあったので敢えて手は動かさず、彼の好きなようにさせた。しかし何かが足りないのか。彼は不満そうに鼻を鳴らした後、噛み付いた

ままだった顎から力を抜き、自分を引き寄せていた腕も外した。さて次はどうするつもりかと黙って観察していると、彼は自らの右手を下へ伸ばした。
大方其の手の行き着く先は自分の其れであろうと見当をつけ、思わぬ見世物もこれで仕舞いかと、何だか期待が外れてがっかりした気分になりながらも、止むを得ず奉仕の続きを行おうとした其の時、行き着いた先が思いも拠らぬ箇所であったことに驚いた。
彼を包み込んでいる自分の手の上から、更に彼の手が包み込んだのだ。
動揺する自分を他所に彼は添えた手に力を込め、自分の手ごと自らの其れを包み込み、握り締めた。
うわ。
そうして再び動き始めた彼の、快楽に身を捩り欲に染まる様子を見て。放置されているに等しい筈なのに、其れを恨みに思うことも無く、寧ろとんでもなく如何わしく、且つ好いものを見せられている気分となり、体温が上昇し自らの頬がぱぁ、と赤く染まるのが分かった。
うわ、‥‥すごい。
彼との実際の行為は無論初めてではなく、彼の性分に付け込む形で幾度も身体を重ねている。故に今更、実際に繋がっても居ない此の状況で、たかがこのようなことでこれ程までに反応するのはおかしいと確かに自分でも思うのだが。
———いや、これは反則だろう‥‥。
只でさえ夜間より部屋が明るい分より良く彼の姿が見えることに加え、彼の手と其れの間に自分の手が挟まれている所為で変に直接的な感触まであるのが性質が悪い。これでは文字や春画、ブロマイ

ドだのにうつつを抜かし過ぎた挙句、いざ実物を前にして、何を致す訳でもなくただ触れただけの状態で無様な体を晒してしまったという同級の何某を笑えない。

笑えない。笑えないが、・・・しかし。

限界が近いのか、益々呼吸が速くなり。鼻にかかった彼の喘ぎ声が耳朶を打つに至って、一切触れられていない筈の己百身の限界も急激に近付いたのを感じた。折角目の前で気持ち良さそうにしてくれているのだから、下手に手を出して気を散じさせたくは無かった。だがどうすべきか。力を添えるべきなのだろうかと迷っている内に、彼は小さな声を上げてあっさり気をやってしまった。

脱力した彼の荒い息と、未だ気の入ったままの自分の、僅かに乱れた吐息が暫しの間明るい室内に満ちた。呼吸が収まるにつれ、漸く自分だけが先に気をやってしまったことに気付いたのか。彼はばつの悪そうな顔になり、目線を逸らしすまんと呟いた。己の出したものですっかり濡れそぼってしまった二人の手を拭おうと、塵紙でも探しているのだろう。周囲を見渡している。

「必要ありません」

「え、」

何を言っているんだこいつは、と訝しげな表情を浮かべ見返してくる彼と視線を合わせ。にこりと微笑みかけながら、彼の手が離された其処に未だ絡みつかせたままの己が手を、ゆっくりと動かし始める。濡れた音を立てながら加えられる刺激に、折角落ち着き始めていた彼の吐息が再び断続的なものへと変化していく。

「お前、ちょっと待て、」
「待って差し上げたいのは山々なんですが、俺自身にも都合というものがございまして」
止めようとする彼の腕を捕らえ、入り始めた気を確かなものとする為に更に指を這わせ続けると、彼の腕から次第に力が抜けた。そうして空いたもう一方の手で器用に軟膏入れの蓋を開け、掬い取った中身を奥へと塗りたくり、心得た彼と呼吸を合わせ指を入れた。
幾度回数を重ねようとも、此の時ばかりは苦しそうな表情を浮かべる彼の眉間に唇を落しながら、これからも屹度そうなのだろうと思い。せめてもの気休めに労るような手つきに変えると、却ってそれが羞恥心を生むのか、苦しんでいる筈の彼の頬は赤らんだ。
彼の顔の間近に自らの顔を寄せ、つぶさに反応を窺いながら指の数を増やしていく。時折彼の好む箇所を掠めてやれば身体が跳ね、次いで表情が悔しげなものに変わった。どうやら順々に調子を取り戻してきてはいるらしい。
先程のような痴態も出来ることなら時折見せて欲しいと思わないでもないのだが、矢張り己の行いによって反応を返されることの方が嬉しかった。――少なくとも、今は未だ。
すっかりほぐれてきた感触にそろそろかなと思い上体を起こすと、其れまで大人しく身を伏せていた彼までが半身を起こしてきた。意図が読めず困惑気味に眺めていると、彼は塵紙を数枚抜き出し、濡れた双方の手を拭い、ゆっくりと抱きついて来た。
もういい加減限界なんだけどなぁと内心途方に暮れながら、しかし強引に押し倒すことも出来ず、黙って抱き締め返す。首元に顔を埋められ、耳にかかった彼の吐息が含み笑いに変わった瞬間、両腕

でがっちり固められた身体ごと捻られ、寝台へと仰向きに押し倒された。
しまった、油断した。
臍を噛んでももう遅い。己が頭上で子供のように勝ち誇った笑みを浮かべる彼を呆れた顔で見遣り、綺麗に拭われた手で乱れた前髪をかき上げ、息を吐いた。
———そうか、あれはこのことへの布石であったか。
「・・・・一体何なんですか、もう」
脱力しきった声で抗議すると、彼はふふふと笑った。
「ちょっと今日は趣向を変えてみようと思って」
何かを企むような笑顔でそう告げられ、どうせまた碌でもないことでしょうと返せば失礼な、と頬を膨らませ憤慨された。
「折角新しいことを教えてあげようとしているのに、そんなこと言っていいのかなぁ」
歌うようにそう呟きながら彼は腰を上げ、自分の腰付近に跨った。
え。まさか。
知識としてそのような繋がり方があると知ってはいたものの、男同士で可能なものなのかと思わず狼狽する自分を眺め。お、久し振りに慌ててるねライドウちゃんと笑いながら彼は自分の其れへ手をかけた。
「慣れたとは言っても、未だに信じられない時があるんだよなぁ。・・・・こんなのが俺の此処に入るだなんて、さ」

人体の不思議ってやつかな。
腰を落しつつ軽く笑って嘯きながらも苦しげな彼の様子に申し訳なく思い、汗で貼り付いた柔らかな髪を優しく梳いてやると、嬉しそうに笑ってくれた。其の様子を見て先程自らをいじらしいと評したことを撤回する。そんなことはお互い様なのだ。
小刻みに息を吐き出しながらもう少しの所で苦しんでいる彼の、気を散じかけている其れに手を伸ばし、力が抜けやすいよう、且つ驚かせないようゆっくりと刺激を与え始めれば、引き結ばれていた彼の口から溜息が漏れた。其れと同時に山場が過ぎ去ったか、安堵した彼が再びゆるやかに腰を落し始め、やっとのことで収めきった。
上体を逸らし気味の体勢で自分の腰に居座り、其れもまた止むを得ないのであろうが、既に一仕事を終えた顔で吐息をつく彼を他所に、自分はといえば漸く与えられたぬくもりと、何時もより強めの締め付けに、今にも動き始めようとする腰を押さえ込むのに精一杯。其れに加えて情人たる彼の其れが手を伸ばせば直ぐのところにあるのだ。これで反応しなければ男ではないだろう。
自ら動かすこともかなわず、もぞもぞと身動ぎしていると、彼は一際大きく溜息をついた後伏せていた目を見開き、さぁ始めようかと微笑みながら腰を動かし始めた。待ち侘びた其の感覚に堪らず声が漏れる。暫くの間彼から与えられる其の快楽に酔いしれる内、こちらは良いが彼の方はどうなんだろうと今更ながらに気になり、目を見開いてよくよく彼の様子を見て取れば、流石に文字通り全てを手引きをしてくれた相手であるとでも言えようか。確り楽しんでいるようだったので安堵した。ただ、一つだけ残念に思う事があるとするならば、上体を逸らすという体勢上、下に居る自分には彼の表情

が僅かにしか目にすることが出来ない、ということだろうか。しかし其の代わりに最も良く彼の状態を示すものがよく見えるのだから、其れもまたよしとするべきなのかもしれない。
打ち震える其れへ再び手を伸ばし、ゆっくりと撫でると彼の体が跳ねた。逸らしていた顔を上げ自分と目を合わせた彼は笑みを浮かべ、自分の手の動きに応えるように動きを早めた。

どうにか同時に気をやった後、未だ少年を身の内に収めたまま座り込み、荒い息をついていた。しかし其の体勢に関しては、少年が再び反応し出す前に解こうにも、動かし続けていた腰が重く、自分からは立てなかったと言う方が正しいだろう。
あーひょっとして地味に危機なのかな俺、と思いながらも自分ではどうにも出来ない現状を前に途方に暮れた。昔は同じことをしても自ら動き回れたような記憶があるのだが、こういうことがあると本当に歳はとりたくないなと思ってしまう。
脱力した目でさり気無く動向を窺っていると、少年は呼吸が整い始めた後上体を起こし、塵紙を抜き取り自分の其れを丁寧に拭き始めた。間の状態で良かったと思いながら、早く終わらせてくれとぼんやり見詰める。使用した塵紙を丸め、屑籠へ放り投げた少年は其処で改めて自分と目線を合わせ、腰に手を這わせた。
不穏な運びに一寸待てと制止の言葉が口をついて出そうになるが、其れより先にゆっくりと体が持ち上げられる感覚を覚えたので慌てて自らも後ろ手につき、力を込めた。
時間をかけて漸く引き抜かれた瞬間、身体の内部を流れるお馴染みの感覚に身が竦み、腕から力が

抜ける。すると少年はすかさず支え、そのままゆっくりと横倒しにした。
「風呂に行かれますか、」
何時もは好んで連れて行ってもらうが、今日は腰が重すぎることもあって少々休んでいたかったのでその旨を伝える。
「・・・・いや、ひと休みしてからでいい。さっきので結構抜けたみたいだし。其れより先に塵紙取ってくれ」
膝の内側を伝う液体の感触に落ち着かずそう要求を述べると少年は直ぐ様応えた。
そのまま手渡してくれるものと思い手を差し出すと、少年の手は其れを素通りし直接自分の膝へと伸ばされる。丁寧に拭き取られる其の動きに殊更抵抗する気も起こらず、身を任せながらあることに気付いた。
「・・・・と、いうかさぁ。何よりも先ず先に、抜くべきじゃねェか、」
順番が少々おかしいことを指摘すると、其れは個人によって優先順位は異なるかと思われます、と返された。
よく言うよ、と笑いながら暗に気が抜けても自らの内に居たがる少年の傾向を指摘してやれば、彼は悪びれる素振りも無く静かに笑いながら自らの後始末を行っていた。
やがて其れらの作業を終えた少年は、自分に寄り添うように身を横たえ。其の白く長い腕を伸ばしてきたかと思うとゆっくりと自分の頭部を抱え、抱き締めてきた。
「今日は俺がこうして差し上げていますから。このままお休みください」

端正な顔に間近で微笑みかけられた。
「だが、」
「良いではないですか。何時かはこうして差し上げたいのだと先程申し上げた筈です」
最初の方で交わした会話を指摘され、そういえばそんなことを言っていたっけかなと思い出す。
「俺にも予行練習させてください」
穏やかに、だが畳み込むように主張され、同時に頭部を優しく撫でられると、疲労した身体は容易く脱力し、瞼が落ちてきた。暖かく心地の良いその感覚に抵抗できず、まぁこのままでもいいかなと思い直す。
「仕方ないな……」
うつらうつらとしながら、しかしあくまでも譲ってやるのだという姿勢を崩そうとしない自分の性分を疾うに承知している少年は、穏やかに微笑み。撫ぜる手を休めないまま有難う御座いますと呟いて、どうやら自分の髪に口付けを落したようだった。どうやら、と形容したのは、もう其の頃には自分が半ば夢の国の住人であったからだ。そうして其れを意識するかしないかの内に、辛うじて残っていた意識すらも心地良い其処へと誘われてしまった。

「———成る程ね」
此れは良いな。
自らの腕の中でぐっすりと眠る情人の身体を抱き締め、眠りを妨げない程度に髪を梳いてやりなが

ら、思っていたよりも遥かに心地良いこの状態に満足する。
当初、恨みがましく愚痴られた折には左程大したことのようには思えなかったものだが、なかなかどうして。彼の嘆きも分からなくも無いな、と苦笑してしまった。
近い将来、自分の体格が彼を上回ることになるしろ、僅かに劣ったままとなるにしろ。――個人的には是非とも前者であって欲しいのだが、其れが駄目ならせめて同じ程度にはなりたいとは思っている。だが何れにせよ、片方が片方を、何も一方的に包み込んでやらなくともいいのだ。例えば今のように。そもそも自分たちはそのような関係なのだから。
時間はまだまだ沢山あるのだ。焦る必要はないだろう。
其処まで考えたところで欠伸が漏れる。流石に早朝から走り回っていた上にこの行為も重なり、疲れてしまった。腕の中の存在が立てる寝息もまた、自分を誘っているように感じられる。
枕元にかけておいた毛布を片手で引き寄せ、両者の身体が収まるように覆う。何時もは些細な振動にも目を覚ます彼だが、行為の後には酷く無防備だ。其れもまた相手が他ならぬ自分であるからだと思うと、純粋な嬉しさと共に誇りまで湧いてくるのが感じられ、我ながら重症だなと苦笑を洩らしながら再び横たわる。
重くなっていく瞼を僅かに開き、穏やかに眠る彼の人の顔を見詰め、おやすみなさいと呟いた後自らもまた眠りに落ちた。